ISSN 1349-2306

民族社会研究

第8号　2016

広島大学
民族社会研究

民族社会研究

第８号　　2016 年

論文

カナダ・バンクーバーの「多様性と包摂」に関する人類学的研究
…… 諏訪　春菜（1）

執筆要領 …… （120）

編集後記 …… 髙谷　紀夫　（122）

広島大学
民族社会研究

『民族社会研究』論文執筆要領

1. ワープロ原稿を原則とする。
2. 英文抄録を付し、広島大学学術情報リポジトリで、原則全文公開する。なお掲載論文の著作権は著者が保持し、本編集部がリポジトリで公開することを許可する。
3. B5サイズの用紙に、1頁に42字×32行でプリントアウトする。
4. 文字は原則として新かなづかい、アラビア数字を使用する。
5. 注は、該当部分の右肩に数字を付し、脚注とする。
6. 引用・参照文献は、本文中または注の文中に、[　]に入れて、著者名、刊行年：頁数を明記する。再版の場合は、初版発行年を(　)内に記す。

   〈例〉　と述べている。[Lynd & Lynd 1956(1929)]

   同一文献から何度も引用する場合も、ibid.上掲書などとせずに、上記方式をくり返す。
7. 文献目録は、論文末に一括して下記方式で作成する。

   7-1　文献の配列は、著者名のアルファベット順とする。但し洋書と和漢書の数が共に多い場合は、別にまとめる。辞典、新聞・雑誌、などは、別にまとめてもかまわない。

   7-2　訳書を用いた場合、原書名を(　)内に併記する。

   〈例〉

   マーカス，ジョージ・E、フィッシャー，マイケル・M・J（永渕康之訳）

   1989　『文化批判としての人類学』東京：紀伊国屋書店.(George E. Marcus and Michael M.J. Fischer 1986 *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences,* Illinois: the University of Chicago)

   7-3　記載順は、著者姓、著者名（イニシャルでも可)、刊行年、論文名、書名・誌名、巻、号、頁、出版地：出版社、とする。(出版地は略してもかまわない。)

   7-4　和漢書の論文名には、「　」を、書名・誌名には『　』を用いる。欧文論文名には、“　”を、書名・誌名には、イタリック体またはアンダーラインを付す。

   〔例〕

   山口　昌男　編著

   1983『見世物の人類学』東京：三省堂

江淵　一公

1983　「象徴体系としてのニュー・エスニシティーアメリカにおける民族活性化運動の社会人類学的分析への一視角ー」『儀礼と象徴ー文化人類学的考察』江淵・伊藤編　515-542 頁　九州大学出版会

Babcock, Barbara

1986　"Modeled Selves: Helen Cordero's 'little people'" In *The Anthropology of Experience,* Victor Turner & Edward Bruner (eds.) pp. 316-343, Urbana and Chicago: Urbana University or Illinois Press.

8. 表、図または図版の番号は、表１、図１、またはTable 1、Figure 1、Plate 1とする。キャプションを付け、引用の場合は必ず必ず出所を明記する。
9. 章、節などの構成及び上記意外の執筆要領については、編集委員の指示に従う。
10. 以上の執筆要領は、2003年度出版分から適用する。

『民族社会研究』論文執筆要領細則

1. ページ設定余白：上35mm、下30mm、左15mm、右15mm
2. フォントおよびサイズ設定他

《文字》日本語：ＭＳ明朝、ローマ字：Century
《主題》12ポイント、太字、中央揃え
《副題》10.5ポイント、太字、中央揃え
《著者名》12ポイント、標準、中央揃え

《本文》10.5ポイント、標準、両端揃え
《見出し》10.5ポイント、標準、中央揃え
(章の番号：アラビア数字、全角、節の番号：アラビア数字、半角)
〔例〕　1　はじめに
1.1 本研究の目的
《脚注》9ポイント、標準、両端揃え
《文献目録》10.5ポイント、左揃えあるいは中央揃え
《メールアドレス》10.5ポイント、中央揃え
《ランニングヘッド》8ポイント

編集後記

『民族社会研究』第８号をお届けする。

本号は、多文化社会を扱ったものである。

人類学的なフィールドワークとは、極めて個人的な「対話」の活動である。フィールド社会で日々生活を営む方々との「対話」はいうまでもなく、自分の中の文化的バイアスとの「対話」も否応なく求められる。その作業の積み重ねが、人類学徒しての成長を促すのである。

人類学者長島信弘氏は次のように語る。

「私は自分の専攻している社会（文化）人類学がかなり好きだし、その基礎となる（かどうかについては近年異論が多い）フィールドワークをしていると充実感に浸れる。普遍論に毒されない、個別事象の個別的考察の方が人類の真実に接近できると考えている。」

（『朝日新聞』2000 年 10 月 27 日付「時のかたち」）

本号で発表されている内容は、筆者自らの体験に基づくものであり、そのさまざまな「対話」の足跡を随所にたどることができる。その率直、かつ真摯な取り組みが、筆者の人類学徒としてのまなざしを深く、そして頼もしくもしている。編集責任者として、筆者に敬意を表するとともに、その人類学的姿勢を今後とも継続されることを願う。読者からの忌憚のないご意見、ご叱正をお寄せいただければ幸いである

『民族社会研究』編集部「第８号」編集責任者
髙谷　紀夫（広島大学大学院総合科学研究科教授）
(E-mail: takatan@hiroshima-u.ac.jp)

執筆者紹介

諏訪　春菜　　広島大学大学院総合科学研究科総合科学専攻
博士課程前期修了（2015 年 3 月）

民族社会研究　第 8 号
2016 年 2 月 1 日　発行
発行者　広島大学『民族社会研究』編集部
〒739-8521　東広島市鏡山 1-7-1
広島大学大学院総合科学研究科

ISSN 1349-2306

HIROSHIMA JOURNAL OF ETHNOLOGICAL STUDIES

No.8 2016

Articles

Anthropological Study of "Diversity and Inclusiveness" in Vancouver, Canada..... Haruna SUWA (1)

Notes for Contributors. ..... (120)

Editorial Notes.....Michio TAKATANI (122)

Ethnological Studies
Hiroshima University